

THE WAY TO WATCH BASEBALL GAMES

プロ野球観戦学



宇佐見 陽 編

プロ野球を楽しく
観戦するための
アンソロジー9章

何が違うのか!?

日本野球と大リーグ

阪神タイガース応援団を
文化人類学的に考察すると……。

日本人にマグワイアの

ホームランは打てない!?

犠牲バントは

本当に役立つか?

日本プロ野球と大リーグ

ビル・ケリー (Bill Kelly) エール大学文化人類学部教授

一九四六年、米国ワシントンD.C.生まれ。六八年、アムハースト大学卒業。八〇年ブランドアイズ大学より博士号を受ける。七五年から七八年まで山形県に住み、その後九五年まで毎年日本に短期滞在し、研究を続ける。アメリカ文化人類学会会員。

日本の総意ではなかったバースの敬遠

おそらく日本の野球について、最も有名なアメリカ人の解説者(評論家)はRobert Whiting(ロバート・ホワイティング)でしょう。彼は日本に二〇年以上も住み、日本語と英語の両方でスポーツについての本や記事を書いており、多くの人に読まれています。一九七七年に出版された彼の最初の本「菊とバット」の冒頭をここに紹介しましょう。

「一見したところでは、日本の野球はアメリカのゲームと同じようにみえるが、実は違う。集団意識、和、年若い者への尊敬、年功序列、そして、面子といった、日本人の生活観がスポーツのほとんどあらゆる面に浸透している。日本にプレーしに来たアメリカ人はすぐに、サムライ野球がアメリカのベースボールと違ったものであることに気付くのである。あるアメリカ人にとってはそれは魅力的で刺激的であるが、あるアメリカ人にとっては、それはいらいらするものであり、時には全くひどいと感ずるものもある」

私はホワイティングの研究を非常に尊敬しておりますし、彼は私よりもはるかに日本野球の研究において経験をもっています。しかしながら、約二〇年前にこの本を読んだから、実は、彼のこの文化イメージを私はあまり好きになれませんでした。つまりあまりに御都合主義かつ単純のように思えたのです。ある意味で、私はこんなステレオタイプを考え直そう、そして、アメリカの読者に日本の野球を再発見してもらおうと思い、現在も調査、研究を続けています。

私は、七月から一〇月の四カ月間、プロ野球シーズンの後半を取材するために日本におります。そして春のトレーニングキャンプを見るため、来年の二月に、またシーズンの前半をリサーチするため、五月にも再来日します。これにより、一年間のシーズンを理解し、この年の野球を日本のプロ野球の歴史の大きなコンテキスト、つまり、一九三〇年代の発祥から、人気と収益を保持してきた現在に至るまでの脈絡の中に位置付け理解する

本を書ければと思っています。

おそらく、これはあまりにも大がかりなプロジェクトであり、私はまだ、この研究の最初の段階にいるにすぎません。そういうわけで、私の今日の話もあまりまとまりのあるものではないことを前もってお詫びしておきます。

Jリーグ・サッカーの最近の人気はたいしたものではありませんが、野球は一〇〇年の間、依然変わらず、日本の最も人気のある、そして最もプレーされているスポーツです。しかし、多くの解説者によると、日本の野球場においてプレーされ、観戦されているのは、ユニークなスポーツであり、アメリカ人の選手や、ファンにとっては、ほとんど見覚えのないものであるということになります。日本の野球についてのこういった伝統的な見方は、ホワイティングの「菊とバット」以来、あまり変化していません。一九九八年、アメリカにおいて「日本における野球」といったテレビドキュメンタリーが放映されましたが、冒頭は次のようなも

のでした。

「テンポが遅いため、野球は日本人の性格に完璧に合っている。保守的なプレーは日本人の生活に対する保守的で慎重なアプローチを映し出している。監督やコーチは野球を封建領主が武士や家臣に期待したのと同じ様な忠誠心や道徳規律を教える手段とみなしている。この侍の規律は、長時間のトレーニングと自己否定、そして、精神性への重視を必要としている。そして同じことが日本の野球へのアプローチにもあてはまる」

つまり、多くのアメリカ人の解説者やファンは今もなお、国民性といった、つまり、主張をもった西欧の個人主義と、圧迫されている日本人の集団主義を対比させるような、うわべだけの見方から抜け出せずにいます。

これは単に、われわれアメリカ人の見方ではありません。日本人の多くも、日本における野球をユニークな「武士的野球道」としての見方をしていきます（ここでは、このことをより肯定的にとら

えてはいますが）。このことは、多くのアメリカのプロ選手が日本チームに雇われる際に置かれる「救世主—スケープゴート」サイクルの中にみごとに現われています。しばしば、新しい外国人選手たちは、チームの救世主として雇われます。彼らは、シーズンが進むにつれ、まあまあ成功はしますが、最終的には、怠惰、わがまま、そして職闘心の欠如によって、解雇されることとなります。これら、外国人選手を見ていると、しばしば、私は「なで人形」といった庶民の伝統治療法を思い出します。これは、道教の人間の形の紙の切り抜きで、こすったり、呪文を唱えることによって病氣となり、人間が紙の人形を燃やしたとき、ついにその人が回復するというものです。この点で「なで人形」は外国人選手の役目と似ているように思えてなりません。

外国人選手にまつわる有名な事件の一つは、一九八五年の一〇月、公式戦も終わりに近づいたときに起こりました。阪神タイガースは、セ・リー

グの優勝がもう決まって、日本シリーズに出場しようとしていました。タイガースのパワフルな打者は、派手で人気のあるRandy Bass（ランディ・バース）で、彼は最終試合までに五四本のホームランを打っていました。これは、王貞治の記録にあと一本のホームランで、タイになるというものでした。

しかし、この最終試合はジャイアンツとの対戦であり、後楽園、つまりジャイアンツのホームグラウンドで行われました。一回目の打席は敬遠で歩かされ、二回目の打席も敬遠でした。三回目の打席も、巨人の投手は敬遠しようとしたが、バースはバットにどうにか球を当て、シングルヒットにしました。そして、四回目の打席も敬遠が続き、最後の打席もやはり敬遠。結局、バースは一回もまともな投球にあうことができませんでした。それゆえ、今日なお続いている王の記録を破ることができないままシーズンを終えることになりました。

この事件はアメリカの新聞で、広く報道されることになりました。「ニューヨーク・タイムズ」の見出しは「日本人は王の記録を守ったのだ」といったもので、つまり、言いたいことは「全く日本人らしい」というものであり、「日本人は外国人を受け入れられない」というものでした。「ニューヨーク・タイムズ」のリポーターは、教会の比喩を使いました。「彼ら（外国人）が教会に入るのとはかまわないが、一番前の席に座ることはできない」。日本人は単に島国意識をもった国民で、外国人選手を平等に、公平に扱うことができないといったものでした。

しかしながら、この解釈のなかにはたくさんの間違ひがあります。現に同じ「ニューヨーク・タイムズ」の記事のなかにも、すこし違った解釈をのぞかせているものもありました。たとえば、後楽園の熱烈なジャイアンツのファンは、バースではなくピッチャーを野次っていたとか、あるいは「朝日新聞」のコラムニストの「ピッチャーの行

ったことは恥ずべきことである」といった言葉が引用されておりました。バース自身はまたこの最終日の扱いにもかわからず、その年の三冠王に輝いたのです（彼はこれを獲得した二番目の外国人になつたわけです）。

つまり、バースを敬遠したのは「日本人」ではなく、「ジャイアンツのピッチャー」だったわけで、つまり単に日本人だということより、もっと深い意味があったように思うのです。つまり、ジャイアンツは宿敵のライバルのタイガースと試合をしていたわけで、このライバル関係をアメリカ人に伝えるのは難しいことです。皆さんもよくご存じのように、この二球団はチーム同士がライバルであるのにとどまらず、関西対関東の争いでもあるわけです。その年はとりわけ、タイガースが優位に立っていたまれな年であり、ジャイアンツは面目のないシーズンだったわけです。ジャイアンツは是非この最終試合に勝ちたかつたであらうし、そのための作戦はタイガースの最強打者を敬



ランディー・バース（時事通信社写真部）

遠することであつたと思うわけです。さらには、ジャイアンツのピッチャーが守っていた記録は、タッグアウトで見ている自分たちの監督の記録だつたわけです。王はおそらく彼自身がタイガースのピッチャー、Gene Baque (ジーン・バックキー) から二度もデッドボールを受けそうになつた、以前の「大騒ぎの事件」を思い出していたのではないかと思ひます。バックキーはデッドボールを投げ、そして王のコーチで恩師でもある荒川は抗議のためグラウンドに出て、逆にバックキーに殴られたのです。

日本、そしてアメリカの野球ファンは、ジャイアンツのピッチャーがベースと勝負にでなかつたのを残念に思ひました。しかし、この事件は日本人の国民性というよりは、ジャイアンツ、タイガース、そしてそのシーズンについてより語つてくれた事件だと私は思うわけです。つまり、このことは、すべてのことを「アメリカ人対日本人」としての対比で見ることの危険性を教えてくれてい

たように思うわけです。

野球とベースボールの差

誤解しないでいただきたいのは、私は日本の野球がアメリカの野球とそっくり同じであるといつてゐるわけではないのです。違いは確かにあり、文化の違いはそのある部分を理解するために重要なわけです。

例えば、アメリカ人はスピードと下半身、そして強さと上半身を関連づける傾向があります。そういうわけで、われわれアメリカ人の打撃理論と投球技術は肩から先を中心とした上半身のスイングと投げを重視しがちです。一方、日本人の考え方は、力を足と腰とに結び付けるため、日本の打撃と投手のコーチの多くは下半身を重視しがちであります。上半身のウエイトトレーニングはアメリカの野球により早く導入され、一方で、日本野球は同じ理由で今もなおランニングを重視して

いるわけです。

もう一つの例を取り上げると、アメリカのプロ球団は球団のPRやファンのための雑誌の中では、監督よりスタープレーヤーを重視する傾向にあります。一方で、日本の球団はつねに、選手より監督をまず第一に取り上げます。日本の監督はアメリカよりはるかに権威をもっているようにみえるわけです。

しかしながら、われわれは安易にこれらの相違を誇張したり、また単に国民性といったことにその相違の原因を求めたりすべきではないのです。プロ野球と大リーグベースボールの相違のいくらかは、それぞれの構造と歴史からくるものと考えます。

①野球界の規模

アメリカ人から見て、二つの国のプロ野球の重要な相違は、その規模の違いです。つまり、日本のプロ球団はアメリカの球団よりも一つひとつの人数は多いのですが、球団数ははるかに少ないわ

けです。日本の球団は一軍と二軍に分かれており、七〇人くらいの選手がいますが、アメリカのチームは二八人までとなっています。しかし、野球ファンはご存じのように、セ、パ合わせて日本は一二の球団しかありませんが、大リーグは二つのリーグと六つの区分のなかで二八の球団をもっています。さらには、アメリカにおいては、二軍制のかわりに、四つのレベルのマイナー・リーグ、つまりAAA、AA、A、そしてルーキーがあり全部で二〇〇以上のプロのマイナー・リーグがあります。マイナー・リーグのチームはそれぞれ別個の球団となっており、別個の経営者が存在し、また別々の地方にあり、またそれぞれは黒字経営である必要があります。

大阪近鉄バファローズの藤井寺球場には、外野の真後ろに寮があり、一軍と二軍のチームは交互にグラウンドで練習しています。選手は一軍と二軍の間を時には毎日行ったり来たりします。これと比べて、私の住んでいる東海岸のコネチカッ

ト州には、大リーグ（コロラド・ロッキーズ）の2Aマイナー・チームがありますが、それは、コロラド・ロッキーズの本拠地デンバーと二〇〇キロも離れております。つまり、私の町にあるこのチームはロッキーズとは全く別個のチームなわけです。

これはいろいろなことを意味しています。まず、日本にはわずか八四〇人くらいしかプロ野球選手がいませんが、アメリカには八〇〇〇人以上のプロ選手がいて、国中のたくさんのチームに広がっているわけです。当然の結果として、日本においては、プロ選手やコーチや監督になれる機会は少ないということになります。日本のプロ野球界は、アメリカよりもはるかに小社会であるわけです。

またこのことは、日本の球団ではアメリカで区分されている二つの機能、つまり「若い人材を育成すること」と「最高の野球を行うこと」を結び付けなければならないということも意味しています。アメリカにおいては、新人選手は普通、大

リーグ球団に昇格するまで、マイナー・リーグ・チームで二年から六年間過ごします。一生昇格しない選手も大勢います。そういうわけで、大リーグの監督は各選手がプロの基本をすでに教えられていることを前提としています。しかし一方、日本の球団監督やコーチは選手に基本的なトレーニングをする必要があります。日本の球団にはコーチがたくさんいて、練習も厳しい理由は、二軍が球団と密接な関係があり、その一部であることからきていると考えます。

② 微細ながら無視できないプロとアマの関係

もう一つの重要な相違は、日本においてアマとプロの野球が厳格に分かれていることです。この壁は取り払われつつありますが、今までは、日本ではプロの選手が引退した後も、高校や大学のチームやリーグのコーチや監督または審判として働くことができませんでした。アメリカにおいては、これらの仕事は、元選手の重要な就職口であり、このことによって、プロの技術やプロ意識が若い

選手に伝わります。

逆に、日本ではコーチや監督のポジションは元プロ選手によって占められています。アメリカの監督は元プロ選手ではない者も多く、もし選手であつたとしても、あまり有名な選手ではありません。日本では、監督のほとんどは元有名選手ばかりです。

③評論家とOB

日本のこの小さなプロ野球界は、アメリカには存在しない二つの重要なタイプの人物を生み出しています。つまり、球団OBと野球評論家です。もちろん、アメリカにもクラブとの結び付きを持ち続けている元選手も何人かいますが、巨人や阪神のOBのように球団の事に関して影響力をもっているようなOB会はありません。

日本のOBは選手をリクルートしたり、トレードしたりするのにしばしば一役買っています。現にそれは、阪神の監督解任・交代劇に表れています。阪神の監督の候補者の全員が、安藤、一枝、

掛布、田淵、吉田といった野球評論家だつたというのもまた驚くべきことです。つまり、日本には野球界とマスメディアの間に位置する特殊な人々がいるように思えるのです。つまり、放送解説者や新聞の評論家として働き、後にコーチや監督として戻っていくような元選手や、元コーチなどがあるのです。つまりそれは回転ドアのように、出たり入ったりすることのできるこれらの人々は、野球界とスポーツマスコミの両方において影響力をもっているわけです。もちろん、アメリカでも元選手がときどき、ジャーナリストや評論家になつたりもしますが、滅多に成功してはいません。

④球団の所有と経営

日本では、すべての球団は大会社や大企業グループによって経営されていますが、アメリカの球団の多くは、金持ちの個人によって所有されています。アトランタ・ブレーブズのテッド・ターナー、ヤンキーズのジョージ・スタインブレンナー、ドジャーズのウォルター・オマリー一族などが有

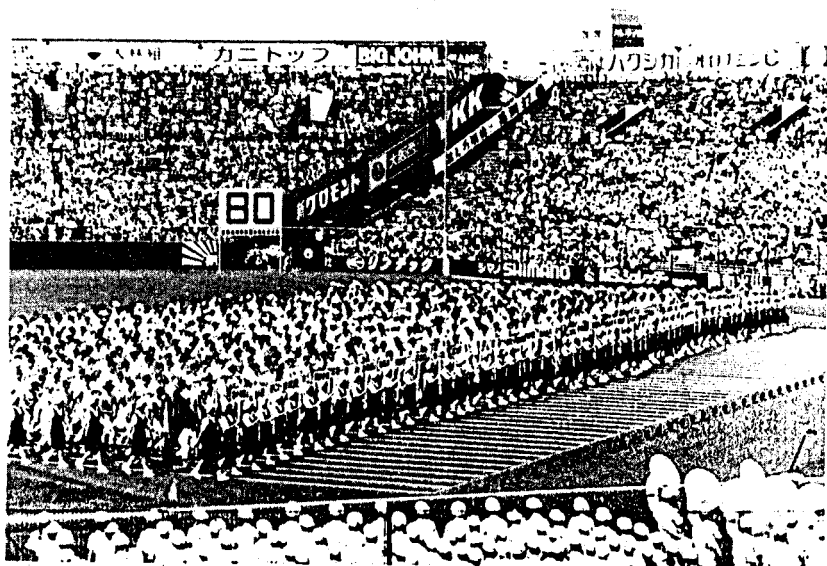
名な例です。この違いは重要で、これはアメリカと日本の間のプロ野球の起源の違いに基づいています。

しかし、オーナーと球団の関係が日本よりもアメリカの方がはるかによいと考えるのは間違いです。阪神、オリックス、近鉄の間の親会社と球団の関係には大きな違いがありますが、アメリカではあまり野球のことについて知らないのに野球チームのことに口を出すオーナーがたくさんいます。ニューヨーク・ヤンキーズのオーナーのジョージ・スタインブレーナーは短気と気まぐれで悪名高く、また監督とフロントを子供のように扱うことで知られています。アメリカの多くのファンは二人のこのオーナーの欲の深さと尊大な態度を強く批判しています。つまり、日本の経営エリートもまた小さな閉鎖社会かもしれませんが、アメリカの二八の経営者だつてもっと閉鎖的なわけです。

⑤野球の歴史

関西のプロ野球が私にとって魅力的な理由の一つは、野球を通して、地域の近代史を理解できるからです。日本の皆さんはよくご存じですが、アメリカ人があまりよく分からないことは、野球が大正、昭和初期の大衆文化の中で、関西のみならず、全国で発展してきたことの重要性です。新聞は購読者を増やすために、野球を利用し、またラジオは視聴者を引きつけるために放送をしましたし、新しい球場は都市のレジャー施設として建設されています。つまり、野球は大正の「ターミナル文化」の重要な一部分だったわけです。

関西では四つのライバルの電鉄会社、つまり阪神、近鉄、阪急、南海が乗客を集め、ターミナルビジネスを展開させ、沿線住宅開発を進めるために、野球チームを使って激しく戦ったのです。アメリカにおいても、野球は都市の労働者階級のための主要なレジャーとなつていますが、日本のようにマスメディアや都市交通の発展のために重要



高校野球開会式（時事通信社写真部）

だということはありません。

甲子園における高校野球

この点に関連して、関西の野球はまた、タイガースのホームグラウンドだけでなく、高校野球のメッカとしての甲子園球場の存在も特徴的です。ここで、アジアにおいて最大のスタジアムが建設された一九二四年以来、高校野球のドラマが繰り広げられています。スペースの神聖さ、努力の純粹さ、そして個人のヒーロー性などが甲子園に神秘的な趣を与えています。

私はテレビで、何年も春の選抜大会と夏の全国選手権大会を見てきましたが、一九九八年の八月、初めて甲子園でトーナメントを生で見ることができました。アメリカ人は日本の高校野球についてもプロ同様の、ステレオタイプをもっています。例えば、プロ野球よりもっと保守的であるとか、全く厳格で、管理的で予測可能であるといったも

のです。

このことは間違つてはいませんが、もし、甲子園野球がただこれだけのものであるのなら、今日まで引き継がれる国民的祭事にはなつていなかったのではなからうかと思つてわけです。

甲子園の選手権、とりわけ夏のトーナメントの特徴は、水面下にある緊張と意外性にあるように思います。

甲子園は確かに秩序にこだわる世界です。例えば、行進、コーチ、監督、審判への絶対なる尊敬、支援者への感謝、チームの上下関係への忠誠などがいい例です。このような礼儀正しさは、日本高野連が厳しく推進するものです。

しかし、同時に甲子園はまさに予測不可能なトーナメントです。選手たちはいままでに経験したこともないプレッシャーをもちます。チームの選手はほとんどが三年生で、つまりメンバーは毎年変わり、同じ出場校でさえも、対戦相手は直前に知らされます。そういうわけで、結果は全く予測

不可能です。つまり、甲子園の魅力と興奮は「何が行われるかは分かつていなくても、結果が全く分からないその緊張感」にあるわけです。

ほかにも興味深い点があります。例えば高校野球トーナメントは地域アイデンティティーを表すものです。いささか皮肉なことですけれども、松山商高の応援団は別にして、応援していた愛媛ファンの多くは愛媛の住民ではなく、愛媛の出身ながら、今は東京、名古屋、大阪に住み、おそらく愛媛には一生戻らない人々であつたのです。つまり、甲子園は八月のお盆の時期、自分のルーツについて都市の人々が考える機会を与えているのです。

アメリカの大学バスケットと同様、高校野球の有名校は有名な進学校ではなく、商業高校、工業高校、そして私立高校です。これを見る大人は世代的経験の溝、実生活のなかの世代間の軋轢あつれいが広がる現代において、若さの純粹さをなつかしんでいるわけです。

そういうわけで、多くの点において、高校野球はアメリカのスクールスポーツとは違います。重要なことは、高校野球が日本における高校のメトリクラシー——能力主義の比喩となり得るだろうかという点です。

高校野球は成功の基準と、競技の場所をモデル化しています。つまり、大学受験のように、客観的で、一度かぎりで驚くべきプレッシャーの下で行われるものです。標準化されオープン化されたルールの下で、おのおののチームは平等にチャンスをもちます。しかしながら、入試のように、私立高校は有利で、リクルートや特別な準備ができるわけです。試合終了後のマスコミの取材は入試結果を張り出す板ボードに似ているようにも思えます。

野球ドラマに隠された物語と統計

プロ野球から高校野球に話がそれまして申し訳ございませんでした。最後に私がアメリカに戻り、

論文を書くとき、次の二点をアメリカの読者に強調したいと思っております。

まず第一に、日本のプロ野球が実力と人脈がからみあった小社会であるという点です。先に述べましたように、日本の野球界は大リーグよりもさらに小さく、閉鎖的で、その結果、人脈やネットワークがさらに重要となってくるわけです。

しかし、日本のプロ野球界は単にコネだけでなく、能力も大事です。このことは日本人にとってごく当たり前ですが、アメリカ人は日本野球界の競争の激しさを理解していないように思います。もちろん、アメリカ人は激しい練習、例えば「千本ノック」や「投げ込み」などといったことは指摘していますが、私が言いたいのは少しこれとは違うことです。つまり、プロ選手としての成功の難しさといったことです。

野球は実力を要する職業で、入団も大変ですが、またけがをする確率も大変高い職業です。また日本のチームは大企業が所有しているので、アメリ

カ人は日本の野球選手は終身雇用と年功序列をもったサラリーマン社員のようなものだと思つていますが、実はそうではなく、自分の能力を實現しなければクビになつてしまいます。

日本の大企業もまた変わりつつあり、実力主義を重視し始めたと多くの人が言つています。このことは昔から野球界の原則でした。プロ野球に入る選手は、その意味では、命をかけるんです。そこにプロ野球の厳しさが分かります。職場としてのプロ野球はおそらく日本の今日型実力主義の原点でしょう。

私は野球の研究者であると同時にファンでもあります。私が日本の野球界の人々と会話をして関心する点は、ファンとして、そのスポーツの魅力を分け合えることです。野球はさまざまな理由からいつて特徴のあるスポーツです。つまり「ゆつくりなベース」と「複雑な戦略」と「打者一人対九人の選手」といった奇妙な構成をもつています。甲子園の話でも述べましたように、野球は決まっ

た型と予想のつかない結果という大変興味深い組み合わせを持っています。

野球は他のスポーツと同様に、動作と語りのおもしろい組み合わせからなつていきます。一見したところでは、スポーツは打つたり、走つたりする動作だけのように思えます。しかしながら、スポーツは同様に語りに依存していることを忘れてはなりません。われわれがゲームに引き付けられ、関心をもつのは、動作だけでなく、その動作に意味を与える、解説、議論、記録、話すことといった「語り」の面であります。

このスポーツの語りは、物語と統計といった二種類があります。すなわち、おのおののゲーム、シリーズ、シーズン、プレーヤー、チームの記録であり、物語であり、統計と物語の縦糸と横糸なのです。語りは単に瞬間に秩序と結合力を与えているだけでなく、同時に瞬間のサスペンスを強調します。「ストライクは続くだろうか?」「中日は広島に追い付くだろうか?」「今中とガルベスは

どちらが勝星を多く上げるでしょうか？」

スポーツの語りはゲームの状況、個人のキャクター、そしてチームのプロフィールといったたつぶりのギャラリーから構成されており、広範に繰り広げたドラマの中に物語と統計が宿っています。そこには惜しくも短い選手生命があり、問題児だが人気のある選手、二軍から来た選手、一度しから見られないすばらしいキャッチやホームラン、そして何千ものキャクターや筋書きがあり

ます。王貞治が江夏を相手にバッターボックスに入るとき、次の瞬間、何が起こるか分かりませんが、同時に予測不可能性は、物語と数字とそのライバル性について私たちが前もって知っていることによつてスリルを高められるのです。この点においてアメリカと日本のファンは同じ楽しみを共有しているといえます。

(一九九六年十月十四日、愛知県国際交流会、講演録)